

先生。ほんとうの学びとは どのようなものですか？ プラトンがいう対話って どういうことですか？

2019.11.28 (木) 19:00-21:00

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ¥1500 学生 ¥500 1ドリンク付き

トークゲスト：栗原裕次 教授

首都大学東京・人文社会学部 / 元 東京学芸大学・教育学部

マスター：藤井健志 教授

東京学芸大学・人文科学講座 / 元 副学長

聞き手：熊井晃史

東京学芸大子ども未来研究所・とをがギャラリー

【お申し込み】



栗原先生と
一緒に
世界を面白がる

Vol
33

席に余裕がある場合は当日受付も可

話は、自分とは何か、幸福とは何か、というところから始まった。う～む、何となく哲学っぽい、いや哲学そのものか。栗原先生は、こうしたことを考えている中で、プラトンに出会ったという。もちろん、あの古代ギリシアの哲学者だ。以来、？年、プラトンひとすじに打ち込んで、浮気はしなかったとおっしゃる。裏切られたことは一度もないそうだ。カップルの間にも似たような関係があるような気がするが、要はご自分が抱えている問題について、常にプラトンから答えが得られたということだ。栗原先生は、筋金の入った「プラトニスト」なのである。

プラトンの『国家』という本には、有名な「洞窟の比喩」という話が載っている。栗原先生の話は、この比喩をめぐって展開された。聞いたことのない人が多いかもしれないが、人間には事物の本当の姿は隠されている。そして多くの人々は、地下の洞窟で壁に映し出された事物の影を本物だと思いこんで、それを見ながら生きていくようなものだ、というたとえである。まあ、影絵を見ているようなものだ。映し出された影絵を本物だと思っているから、そのもとに本当の姿があるということには気がつかない。言い換えれば、無知であるのに、無知であることに気がついていないということである。

無知ならば教育をしてやればよいじゃないかと思ったりもするが、ことはそう簡単ではない。無知な人間は、自分が無知であることを知らないから、知りたいと思わないのである。ここら辺は、会場にたくさん来てくれた学生諸君が、記憶にとどめておいてくれると嬉しい。しかしさらにやっかいなのは、本当の姿を考えることだけが教育ではないことだ。影絵の世界にもそれなりの教育があるのだ。このあたりで、敏感な人は影絵とは、一般社会や世間のことだと気がついたと思う。私たちは、この社会で当たり前なこととか、通念とかを教育されて育ってきた。

いわば社会で生きるための知識を教育されてきた。しかしこれこそ影絵の世界の教育である。影であるにもかかわらず私たちは本当の知識を得たと思いこんでいるのである。

だが、そうした知識では、自分とは何か、幸福とは何かは答えられない。いや答えられるかもしれないが、それは、試験に合格すれば、金がもうかれれば、えらくなれば幸福になるといった程度のもものではなからうか。死ぬこともありうる人生の荒波の中で、その程度の幸福は簡単に吹っ飛んでしまうであろう。自分とは何かも、わからなくなるのに違いない。だったら教育を受けていても、私たちは無知だと言えるのではないだろうか。と言うか、そもそもそんな教育は、無教育だとプラトンは言っているらしい。栗原先生は、「動かないもの」「普遍的なもの」に触れなければいけないと、何回かおっしゃっていた。ここでもう少し「魂」の話も聞きたかったが、時間が足りなかった。

それにしても、教育とはどういう活動なのだろう？プラトンはいっぱい本を書いて、2000年以上もの間、私たちに啓発し続けているのだが、その師のソクラテス是对話を繰り返したという。基本は一对一の対話である。彼はブラブラ歩きながら出会った相手と対話をして、徹底的に相手の話の矛盾を暴き出したらしい。だから威張っている人や、学校の先生のような人ほど、ソクラテスを怖がったに違いない。いや、現代にソクラテスが出現したら、やはり私たちのほとんどは、ソクラテスを怖がると思う。でもそうした場面にこそ、影絵を打ち砕く教育が、生き生きとした姿を現すのではなからうか。

栗原先生は、伝えられているソクラテスのイメージとはだいぶ違って、なかなかカッコいい人である。しかし、立ちっぱなしで、行ったり来た

りし、手を振り上げながら、熱演する栗原先生の姿は、ソクラテスそのものだったような気がする。もしかしたら、あの場にソクラテスの霊が降りてきていて、栗原先生の口を通して、語ったのかもしれない。生半可な知識で満足するなよ！と。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長／まちのカルチャーカフェ主宰・マスター
東京学芸大図書館カフェnote cafe 発起人

• Plato Republica 514a-515a

(1) Μετὰ ταῦτα δὴ, εἶπον, ἀπείκασον τοιούτῳ πάθει τὴν (1)
ἡτέραν φύσιν παιδείας τε περί και ἀπαιδευσίας. ἰδὲ γὰρ
ἀνθρώπους οἷον ἐν καταγείῳ οἰκήσει σπηλαιώδει, ἀναπεπτα-
μένην πρὸς τὸ φῶς τὴν εἴσοδον ἐχούση μακρὰν παρὰ πᾶν τὸ
σπήλαιον, ἐν ταύτῃ ἐκ παίδων ὄντας ἐν δεσμοῖς, και τὰ σκέλη (5)
(1) και τοὺς ἀγένας, ὥστε μένειν τε αὐτοῦ[ς] εἷς τε τὸ πρόσθεν (1)
μὲνον ὄραν, κύκλῳ δὲ τὰς κεφαλὰς ὑπὸ τοῦ δεσμοῦ ἀδυνάτους
περιάγειν· φῶς δὲ αὐτοῖς πυρὸς ἄνωθεν και πόρρωθεν
κίνομενον ὀπισθεν αὐτῶν, μεταξὺ δὲ τοῦ πυρὸς και τῶν
δεσμῶν ἐπάνω ὁδόν, παρ' ἣν ἰδὲ τειχίον παρφοδομημένον (5)
ἀπὸ περ τοῖς θαυματοποιοῖς πρὸ τῶν ἀνθρώπων πρόκειται τὰ
παραφράγματα, ὑπὲρ ὧν τὰ θαύματα δεικνύασιν.
— ἄρα, ἔφη.
— ἄρα τοῖνυν παρὰ τοῦτο τὸ τειχίον φέροντας ἀνθρώπους
(1) σκευὴ τε παντοδαπὰ ὑπερέχοντα τοῦ τειχίου και ἀνδριάντας (1)

